



思
い
出
三
つ



山
田
徳
兵
衛

その一

このたび「幼児の教育」からお手紙をいただき、倉橋先生が亡くなられてからも二十年になるとのことにもまず驚いたが、その時すぐ浮かんだ先生のおもかげは、毎年、人形を審査なさる時の楽しそうなお顔付きであった。

昭和のはじめごろ、わたくしは先生とご一しょに童宝美術院という団体をつくっていて、毎春日本橋の三越で人形や絵画・工芸品の公募展をひらいていた。これも今は故人になられた巖谷小波・和田英作・石井柏亭・山本鼎・津田信夫・西沢笛歌などという方々と共に先生やわたくしもその同人であったが、出品物の審査が毎年、神田豊島町の事務所で開かれた。先生はいつもさも楽しみのごとくに審査場へかけつけてこられたが、その節の先生が人形を審査される時のお顔は今も忘れかねている。

小さい人形を一個一個、眼鏡に鍔つばを寄せてお眼鏡越しにのぞきこまれるように眺めて歩かれるのだが、ほんとうに慈顔とでも称したいようなお顔で実ににこにことして審査されるのであった。審査というより、鑑賞されるといった気分であって、「可愛いですわ」とか「ああきれいだ」と

かいわれながら回られるのだが、ほかの先生が落として「は？」といわれても「まあ、とつてあげたらどうでしょう」などといわれて、人形に対しては先生はやや点が甘いこともあるほどであった。

その二

こんなことを書くと、ほかの先生に悪いかもしれないが、大正から昭和のはじめごろ童話を話される先生方はたいていどこかのお国なまりのある方が多かった。当時はそれがむしろ童話調とでも思われていたかもしれないし、お国なまりに一種の味があったともいえなくもないが、その中で、巖谷小波先生と、倉橋先生のお話は、ほとんどなまりがなくて、東京生まれのわたくしたちには実に聴きよかつた。

童話にかぎらず、先生のお話は、愛嬌があつて、ウィットがあつて、むずかしい内容のことでもまことに楽しく聴けた。殊にいわるテーブルスピーチにいたつては時によくと失礼ながら上品な落語を聴く感さえあつたものだ。

その三

先生の中野のお宅はいろいろな用件でしばしばうかがった。その折ごと奥様にも何かとお世話になったが、ある時、先生が特ににこにこされて二つの人形を持ち出された。

それは、福助サンとおかめサンの一对の童顔の御所人形であった。

その人形は、先生が宮中に召されて、当時まだ小さかった皇太子殿下に童話をお聴かせしたお礼にいただいたのだとのことであった。御所人形なので、白く艶々した裸の人形であったが、先生は「このままでは冬が来るといかに寒そうなので、これにふさわしいキモノを着せてくれなिका」とのお話であった。まるまると太った御所人形に着付けをするのは、なかなかむずかしいのだが、人形をじっくりと先生のお気持ちがよくわかったので、とどお引受けすることになった。

かみしもに使うための鮫小紋の裂れを探したり、おかめサンの衣裳の松竹梅・鶴亀の小さな小さな刺繍など大分苦勞をしたが、ともかくも出来上がってお宅へお届けした時、

先生はほんとうに喜ばれて相好を崩されんばかりのお顔を
して褒めて喜んで下さった。

この一对の人形は、多分今日も倉橋さんのお宅に保存されて
いることと思う。

